

学位論文の要旨

学籍番号 16GD001

氏名 おおいし たけし 大石 剛史

1. 論文題目

ケアリングコミュニティの哲学的・思想的研究
—社会福祉の新しい地平を拓く地域福祉の鍵概念としてのケアリングコミュニティ概念—

2. 論文の要旨

1) 問題の所在, 研究の意義・目的

厚生労働省は2016年7月、「地域共生社会の実現」を掲げ、いわゆる、「我が事、丸ごと」のスローガンのもと、高齢者を主な対象としていた「地域包括ケアシステム」を全世代対象型のケアシステムにしていくこと、また地域に住む住民が「我が事」として福祉課題を捉え、地域の中に新たな支え合いの仕組みを構築していくことなどが、これからの地域におけるケアのあり方であることを示した。

社会福祉の問題を対象分野別に「縦割り」で捉えるのではなく、「横割り」的に「丸ごと」捉えるという視点や、福祉問題を「我が事」として住民主体の地域福祉を展開するという視点は、地域福祉の哲学・思想において求められてきたものであり、国のこのような方向性は、地域福祉の哲学・思想を具現化しようとする方向性としては評価できる。

しかし、これらの国の方向性は、一方でわが国の社会保障財政が逼迫する中で、「経済合理性」の側面から求められていることも否定できない。もっとも、高齢者の介護ニーズの増大に対応するためには、公的サービスの提供をできるだけ効率化するとともに、人々の「互助」を活性化させることで、公的な財政支出をできる限り抑えようとする国の思惑は、わが国の財政状況を考えた場合、理解できないわけではない。

問題は、「経済的合理性」の側面からなされるこの改革が、結果的に「安上り福祉」になってしまうことである。このような事態に陥らないようにするためには、これからの地域福祉の目指すべき方向性について、「経済的合理性」の側面のみからでなく、その価値的側面、思想的側面、哲学的側面から精緻に検討することが必要である。

本研究はこのような問題意識を動機とし、これからの地域福祉が目指すべき方向性を明らかにするため、「ケアリングコミュニティ」という概念を哲学的に検討する。「ケアリングコミュニティ」という言葉自体は、現時点でまだそれほど多く社会福祉学の研究・実践において用いられている言葉ではない。しかし、先述のわが国の改革の方向性、すなわち「互助」の強化という方向性と相まって、地域の中で人々が互いに助け合う新しいコミュニティの構築の必要性という側面から、この「ケアリングコミュニティ」という言葉が用いられることが増えてきている。

筆者自身も、この「ケアリングコミュニティ」という言葉が内包する概念が、これからの地域福祉の方向性を指し示す概念を内包する言葉になり得ると考えている。しかし、新しい言葉は、概念が十分検討されぬまま安易に用いられれば、物事の本質を覆い隠す「き

れいな言葉」として機能する危険性がある。一方、新しい言葉は、これまでの概念とは異なる、文字通り新しい価値を生み出す可能性もある。本研究では、このような問題意識に基づき、「ケアリングコミュニティ」概念についての哲学的検討を行う。そして、その概念の検討を通して、私たちが目指すべき「ケアし合うコミュニティ」の本来的あり方（本質）を明らかにし、その本質に基づいたコミュニティづくりの方法論を明らかにすることを目的とする。

また、ケアリングコミュニティの哲学・思想を精緻に明らかにすることができれば、これからの地域福祉実践が目指すべき（目的概念としての）「地域づくり」、「地域共生社会」の基礎理論を確立することができると考えている。社会福祉実践はすぐれて哲学・思想的実践である。人間存在の本質を哲学・思想的に深く探求することは、社会福祉実践にとって不可欠である。そのような社会福祉実践の哲学・思想的な目的概念としての「ケアリングコミュニティ」概念を精緻に明らかにすることが本研究の目的である。

2) 研究の方法

研究方法としては、「ケアリングコミュニティ」概念自体の先行研究及び、関連概念である、「ケア」、「ケアリング」、「コミュニティ」などについての先行研究をまずは行う。この先行研究において、「ケアリングコミュニティ」という概念がどのような意味内容を含むものとして現時点では捉えられているのかをできる限り精緻に明らかにする。その上で、関連する分野の哲学、思想も援用し、「ケアリングコミュニティ」の持つべき本質的価値、構成要素、構造、限界等について哲学的に探究する。そして、その「ケアリングコミュニティ」の本質的把握を基礎として、現実的にはどのようなコミュニティを、どのような形で構築していくのか、「ケアリングコミュニティ」の实在的構造を（ケアリングコミュニティの本質から）演繹的に明らかにする。

3) 論文の概要

本論文は以下のような各章で構成される。

序章では、本研究の問題の所在、目的、意義、研究の方法、研究概要について述べた。第1章では、「ケアリングコミュニティ」概念を検討する前提として、関連概念である「ケア」、「ケアリング」概念について、先行研究を参考に、現時点での「ケア」、「ケアリング」概念の到達点について明らかにした。「ケア」、「ケアリング」概念は、発達心理学の分野でキャロル・ギリガンが「ケアの倫理」を提起して以来、「正義の倫理」とは異なる倫理概念として様々な哲学的検討が行われてきた。現在、「ケア」、「ケアリング」概念は、対人援助分野における重要な倫理概念としての位置づけを、「正義の倫理」に比肩して持ちうるものとして検討されるに至っている。本章では、ギリガンの「ケアの倫理」の提起以降の「ケア」、「ケアリング」概念について、ノディングス（教育学）、ベナー（看護学）らの「ケア」、「ケアリング」概念の先行研究を分析し、品川哲彦の倫理的なケア論に依拠しつつ、「ケア」、「ケアリング」概念の到達点と限界を示した。その結果、「ケアリング」あるいは「ケアの倫理」に含まれる価値として、人間存在を①関係的存在、②主体的存在、③身体性を通じた他者への共感可能性と現実的存在、④「ケア」を人間存在にとって「重荷」と「生きる意味」双方の源泉になり得ると捉える視点を指摘した。またケアの倫理的価値として、

①「正義の倫理」が周縁化する人々をケアの対象にするという倫理，②「無条件のケアの提供」という倫理，③「感受性」を基盤にした「実存的共感」という倫理があることを指摘した．一方，「ケアの倫理」の限界としては，①無限のケアリングの要請という限界，②ケアの誤謬性という限界，③「出会われない他者」へのケア責任の免責という限界を指摘した．

第2章では，第1章で検討した「ケア」，「ケアリング」概念及び「ケアリングコミュニティ」の先行研究を踏まえ，現時点でのケアリングコミュニティ概念の到達点を明らかにした．本章では，①大橋謙策の「ケアリングコミュニティ」概念についての論考，②広井良典の「ケア」と「コミュニティ」概念についての論考，そして，③小林正弥の「ケアリングコミュニティタリアニズム」の論考を取り上げ，結果として，大橋謙策のケアリングコミュニティ概念について，「ケアリング」の意義と限界を踏まえたうえで，「6つの自立概念」，「主体形成の理論」，「コミュニティソーシャルワークの理論」などの大橋独自の理論を通して，「ケアリングコミュニティ」概念の全体像が精緻に構築されていることを指摘し，現時点で最も精緻な「ケアリングコミュニティ」概念を提示していると評価した．広井良典の「ケア」と「コミュニティ」概念の検討においては，人間が歴史的に外部化してきた「ケア（人間の関係性）」，「自然」，「スピリチュアリティ」との関係性を取り戻す概念として「ケア」と「コミュニティ」の価値が改めて問い直されていることを指摘し，これらを含んだ「新しい公共性」の概念として，「ケアリングコミュニティ」概念が捉えられていることを指摘した．小林正弥の「ケアリングコミュニティタリアニズム」概念の検討からは，「ケアの倫理」と「正義の倫理」のそれぞれの限界を補完し，この2つの倫理の編み合わせを媒介する思想として「コミュニティタリアニズム」が位置づけられることを指摘した．

第3章では，第2章までの「ケアリングコミュニティ」概念の到達点を踏まえた上で，筆者独自の「ケアリングコミュニティ」概念の検討を行った．筆者は「ケア」，「ケアリング」，および「ケアリングコミュニティ」の先行研究を踏まえると，「ケアリングコミュニティ」概念を検討する分析枠組みとしては，少なくとも，①ケアの倫理，②進化人類学の知見，③コミュニティタリアニズム，④正義の倫理，⑤経済合理性，⑥科学的合理性，⑦スピリチュアリティ，⑧討議倫理の8つの視点が必要であることを指摘し，この8つの視点の分析枠組みとしての意義を検討した．

第4章では，第3章で検討したケアリングコミュニティ概念を踏まえ，ケアリングコミュニティ概念の構造を検討した．まず3章で検討した8つの分析枠組みを用いて，ケアリングコミュニティの内的構造連関を分析し，8つの分析枠組みどのように関連し合っ，ケアリングコミュニティ内部を構築しているかを検討した．別添図 4-②がその8つの枠組みの布置図である．

筆者は，これらの8つの分析枠組みの構造連関から，ケアリングコミュニティとは，単に「ケア」が機能的にコミュニティの中で展開されている状況を指すものではなく，「親密圏」や「公共圏」の中で人間の「生きる意味」や「社会の価値」が，「ケアリング」を通じて豊かに生成されることが重要だと考察した．そして，そのようなケアリングを通じた，「社会の豊かな価値の生成を意図的に図っていく場である」ということこそ，ケアリングコミュニティ概念の中核に位置付けるべき要素であると考え，次のようにケアリングコミュニティ概念を定義した．

「ケアリングコミュニティとは、「人」の存在論的本来性である「関心」に基づいて「世界」と関わり、また「身体性」と、遺伝的形質として人類が有している「利他的傾向」を基盤にした「共感」にもとづいて相互にケアし合う（ケアリングする）ことを中核概念として持つコミュニティである。このコミュニティでは、「人」が、「自然」、「他者」、「社会」、「スピリチュアルなもの」との関りを通して、様々なその人自身の、あるいはその人が暮らす「世界」の「意味や価値」を創造する。そして、その「意味や価値」を元に、「公共圏」における熟議に基づいて構築される「システム（正義の倫理）」の力も活用しながら、人々が自らの「実存的意味」をよりよく豊かに生きることができるよう、コミュニティの中でお互いに関わり合い、対話や討議を行い、共に成長し合いながら、支え合う実践（ケアリング）を行なう。このような「ケアリング」の展開がさらにコミュニティ内部の「意味や価値」の豊かな創造を促し、それぞれの成員の「実存的意味の深化」と、コミュニティ全体の「意味（価値）の蓄積」を同時に、意図的に図っていく場がケアリングコミュニティである」

この定義では、存在論的現象学と、進化人類学の知見を基盤にした「ケアする本来性」を持つ人間存在の認識を軸に、コミュニティの中で人々が豊かにケアリングすることで、「自分の価値」や「社会の価値」を豊かに創造し、結果的にそれらが、人々の「真に豊かに生きる源泉」になるという内容を特に強調している。そして、それらの「価値」は、「自然」や「他者」、「スピリチュアルなもの」との関わり（ケアリング）を通して生成されること、そして、その「価値」や「意味」に基づいて、「システム」が構築されなければならないことも表現した。さらに、コミュニティに共有されるべき「意味生成」のプロセスとして、「熟議」や「討議倫理」の必要性を表現し、最後にこれらのプロセス全体を通して人々が「主体形成（成長）」し、自らの「実存的意味」を高め、そして、そのような人々によって生み出される「価値」がさらにコミュニティ全体を豊かにしていくという好循環を意図的に生み出すことが重要であることを、概念の中に盛り込んだ。

また、このケアリングコミュニティ概念の定義に基づき、ケアリングコミュニティが実在的にはどのような機能を持ち、どのような実在的構造を成しているかを検討した。ケアリングコミュニティの機能としては、①関係形成機能、②ケアの意味の生成機能、③システム形成機能、④ケア提供機能、⑤主体形成機能があることを示し、それらが、「親密圏」、「公共圏」、「システム」の各領域場で相互に関連しながら、ケアリングコミュニティのダイナミックな働きを成していることを考察した。その実在的構造連関を図式化したのが、別添図 4-④である。さらに、このように検討されたケアリングコミュニティ概念が、地域福祉実践の方法論であるコミュニティソーシャルワークの機能と関連させて、どのように機能するかを検討した。その関連図が別添図 4-⑤になる。

第5章では、以上の検討を総合して、本研究の結論、及び今後の課題について検討した。本研究の意義として、①地域福祉理論・実践の「メタ理論＝目的概念」としてのケアリングコミュニティ概念を提示できた意義、②「ケア」、「ケアリング」の哲学、「コミュニティアリズム」、「討議倫理」を地域福祉・社会福祉理論に導入した意義、③地域福祉が対象と

する「人間」を「存在論的現象学」の哲学を用いて位置づけた意義、④「機能」のみの場ではなく、「意味」や「価値」を生成する場としてケアリングコミュニティを捉えた意義、⑤「システム」や「科学的合理性」、「経済的合理性」を内に含みながらそれに還元されない「生活世界」としてケアリングコミュニティを捉えた意義、⑥ケアリングコミュニティにおけるケアリングのプロセス自体を主体形成のプロセスとして捉えた意義、⑦8つのケアリングコミュニティの分析枠組み（構成要素）の内的構造連関を示した意義、⑧上記を総合して、包括的な地域福祉実践の哲学を検討した意義を挙げた。

一方、研究の限界と今後の課題として、①より精緻で具体的な哲学的・倫理的枠組みを検討する必要性、②ケアリングコミュニティ概念を補完する実証的研究の必要性、③ケアリングコミュニティ概念を具現化する、具体的実践方法の検討の3点をあげた。

5) 本研究の意義と今後の課題

本研究において「ケアリングコミュニティ」概念を精緻に検討したことの意義は、第1に、これからの地域福祉理論の1つの目的概念としての「コミュニティ」のあり方をより精緻に、哲学・思想的に明示することができた点である。地域福祉はすぐれて実践の科学であるが、それゆえに、その実践を方向付ける思想・哲学・価値が重要である。なぜなら「実践」は、ややもすれば時代の情勢やその他の外的要因により、本来尊重すべき理論内部の価値を貫徹することが難しい場合があるからである。「ケアリングコミュニティ」概念を哲学・思想的に精緻に明らかにすることによって、実践の柱となる地域福祉の哲学・思想的価値をより強固にできたことが、本研究の第1の意義である。

第2に、本研究では、これまで地域福祉理論研究において用いられることが少なかった、多様な分野の哲学、倫理、あるいは科学的知見を用いてケアリングコミュニティ概念の検討を行った。これにより、今後の地域福祉研究が参照すべき多様な他分野の哲学、思想、科学的知見への接続が豊かになると考えている。地域福祉はもともと、様々な分野の総合的な知見の元に理論構成がなされてきた学問分野であると考えられる。しかし、ケアリングコミュニティを精緻に検討していく中で、これまであまり地域福祉研究の分野で参照されてこなかった様々な知見を用いることができることに、筆者自身気づかされることになった。本研究は、そのような意味で、今後の地域福祉研究のさらなる広がり基礎づける研究にもなると考えている。

これらの2点の本研究の意義は、厳しい超高齢社会の現実の中で私たちがどのような価値や哲学を大切に、社会福祉実践を行えばよいかという課題を考える上で、1つの拠って立つ基盤を提供するものと考えている。本研究がそのような課題に対しての一助となれば幸いである。一方、研究の限界と今後の課題として、今回の研究ではケアリングコミュニティ概念及びその全体像を把握することに焦点を合わせたため、筆者が検討した8つの分析枠組みそれぞれのより詳細な検討はできていない。地域福祉実践を行う上では、より実践的な哲学的基盤、思想的基盤が求められるといえ、実践により資することのできる哲学的知見を今後検討していく必要がある。またその際には、単に哲学思弁的な研究では自ずと限界がある。哲学的研究と同時に様々な分野の科学的知見（進化生物学、脳科学のような）を参照する必要があるだろう。多様な分野の哲学と科学的知見を車の両輪とし、地域福祉実践の豊かな可能性を、新たに拓いていく必要がある。